

「遠くて近い信仰者」⑥ヨシュア

ヨシュア記 6:1~21

ヨシュアは、誰もが「勇者」と呼ぶことのできる人でした。カナンを偵察に行った人々の大多数が「カナンの土地には強い民族がいて、そこに行ったら、私たちは、たちまち彼らの食べ物になってしまう」と言った時も、ヨシュアはカレブとともに「神が共におられるから、われわれはカナンの土地を征服することができる」と言って退きませんでした。荒野の旅で、イスラエルの人々が神に不平を鳴らした時も、モーセとともに神の側に立ちました。それで、ヨシュアはモーセの後継者に選ばれ、イスラエルの民をカナンの地に導き入れ、イスラエルに約束の地を継がせました。ヨシュアは、人々の前で「私と私の家とは、主に仕える。」ヨシュア 24:15 と明言して、その生涯の終わりまで主に従い通しました。

ヨシュアが偉大なリーダーであり、信仰の勇者であることは、さまざまな箇所を示されていますが、今朝は、ヨシュアが、どのような信仰の勇者であったかを、エリコの町を陥落した時のことから学びましょう。

第一に、ヨシュアは、ことばと行いが一致した人でした。

かつて、ヨシュアは、カナンへの偵察隊の一員でした。十二人のうち十人までが不信仰で否定的なことを言いましたが、ヨシュアとカレブは、「私たちが巡り歩いて探った地は、すばらしく良い地だった。…あの地には、乳と蜜とが流れている。…その地の人々を恐れてはならない。…彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし主が私たちとともにおられるのだ。…」民数記 14:7-9 と言いました。信仰の勇者たちは、物事の否定的な面だけでなく、肯定的、積極的な面を見、神の約束や祝福を見ることができた人々でしたが、ヨシュアもカナンの土地の素晴らしさと、神の約束をしっかりと見、それを信じていました。しかも、どんなに反対があっても、自分の信じることをはっきりと表明する勇氣を持っていました。そしてヨシュアとカレブは、イスラエルの人々を説得しようとしたのですが、人々は、ヨシュアとカレブを石打ちに、つまり殺そうとしたのです。人々は自分の不安な思いや恐怖を大きくするものを消し去ることに必死で神のことばには心を向けようとはしなかったのです。つまり不信仰です。この時の不従順のために、約束の地に入るのに四十年も待たなければなりません。今朝の聖書の箇所は、それから四十年後のことを描いています。ここでヨシュアはエリコの町を目の前にしています。古代のエリコの町は、高さ 10 メートルの城壁で守られていました。しかもそれは二重になっていて、内側は幅 4 メートル、外側が幅 2 メートルもあったのです。少し教会学校で用いられたイラストがあります。ヨシュアは目の前に立ちだかる、この堅固な城壁を目の当たりにしても、かつて語ったことばを撤回してはいません。ヨシュアは、恐れることなくエリコの町に立ち向かっています。今でも人によっては、とかく耳障りの良いことは言いますが、自分自身は少しも、それを信じてはいないし、実行もしないということがあります。都合が悪くなると、以前話したことを、いろんな言い訳をつけて翻したりします。しかし、ヨシュアはそのようなリーダーではありませんでした。彼は、四十年前に語ったことばどおりに、エリコの町の守りはすでに取り除かれている、その城壁は崩れると信じて行動しています。

私たちの心とことばと行いは、ほんとうは一つのものでなければならないのですが、かならずしも、いつも一致しているとはかぎりません。信じていても、そのことを人を恐れて言い表わさなかったり、自分が口で言っていることを少しも行っていない場合もあります。その一番悪い例が、律法学者、パリサイ人と呼ばれる人々でした。イエスは「ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。」マタイ 23:3 と言っています。ヤコブは、「たましいを離れたからだは、死んだものであるのと同様に、行ない

のない信仰は、死んでいるのです。」ヤコブ 2:26 と言って、信仰と行いは切っても切り離せないものであると教えています。また、ペテロは「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。」ペテロ第一 1:15 と言って、「きよめ」は行いに表れるべきものだとして教えています。「きよめは語るものではなく、見せるものである」と良く言われますが、その通りです。ペテロは「異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」ペテロ第一 2:12 とも言っています。

私たちは、すべてのことを、語るとおりに行うことができるわけではありません。どんなにしても、ことばと行いにギャップは残るでしょう。私自身、信仰生活と共にそのギャップがますます大きくなっていくような気すらします。しかし、それをごまかさないうで、ギャップを埋めていく努力を、神は喜ばれるのです。神の助けをいただいて、信じるのが語ることばとなり、語ることばが行いとなるよう、励んでいきましょう。

第二に、ヨシュアは、徹底して神のことばに服従した人でした。

ヨシュアがエリコの町を攻撃するため兵士たちに命じたことは、祭司たちが担ぐ契約の箱の前後をばさんで町の周りを、黙って行進するというものでした。祭司たちが角笛を吹き鳴らすだけで、何の物音も立てないでイスラエルの兵士たちがエリコの町のまわりを行進していくのを見たエリコの町の人々は、どう思ったでしょうね。何事がおこるのだろうか、最初は不安になり、恐れたことでしょうか、何事も起こらないことを知ると、やがて、イスラエルの人々を馬鹿にしはじめたかもしれません。また、兵士たちはどう思ったでしょうか。これが普通の軍隊なら、こんな馬鹿げたことをしていても何もならないのではないかという疑問が起こり、兵士の士気が損われ、軍隊の統率がとれなくなってしまったかもしれません。そしてこのような戦略は指揮官の権威を損なうものとなったでしょう。しかし、ヨシュアはこの戦略を押し通しました。なぜなら、これは、主がヨシュアに与えられた戦略だったからです。ヨシュアは、それが主が語られたこと、主のことばであったのでどんなに非常識に見えても、それに服従したのです。

エリコの町に着く前にイスラエルの民が、ヨルダン川を渡って約束の地に入った時、祭司たちによって担がれた契約の箱がまず、水の中に入りました。すると、ヨルダン川の水が上流でせき止められ、イスラエルの民は干上がった川を渡ってカナン地の地に入ることができました。それは、イスラエルがカナン地の地に入ってきたのは、彼らの意図によってでも、彼らの力によってでもなく、神の導きにより、神の力によってであったことを、彼らの心に刻みつける出来事でした。これは誰かの思いつきでなされていることではなく神様の御心の中にあることなのです。それと同じように、エリコの町のまわりを行進する契約の箱は、カナンの土地がイスラエルの力ではなく、神の力によって、彼らのものになるということを示すものだったのです。イスラエルの兵士たちは、契約の箱に従って、城壁の周りをまわり続けるうちに、イスラエルを導いてくださる神への信仰を確かめていったのです。

七日目に、町を七周し、兵士たちがときをあげると、あの堅固な城壁が崩れ、ヨシュアはやすやすとその町を手に入れることができました。ヨシュアは神のことばを信じ、それに従い、そして、勝利を得ました。神のことばは、たんに、慰めのことば、励ましのことば、また知恵のことばという以上のものです。それは、信じる者、それに従うもの、また、実行するものに結果を与えるものです。神は言われます。

「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、

わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」イザヤ 55:10-11

ヨシュアはことばと行いが一致していた人であり、また、神のことばに服従した人でしたが、このふたつは、別々のものではありません。神のことばに服従する人が、ことばと行いに矛盾のない人になっていくのです。神のことばを口にしてはいても、実際にそれを守り行うのでなければ、結果を見ることはできません。信仰の根を張るとは、みことばを実行することであり、そしてはじめて、私たちは実を結ぶものとなることができるのです。ヨシュアが神のことばが現実の中に働くのを目の当たりにしたように、私たちも、みことばに服従し、それを実行することによって、人生に神の大きな祝福の実を見る者となろうではありませんか。今年の教会のテーマは「実り」と「成長」です。みことばを実行することによって成長します。成長しないで実を結ぶことはありません。